

教材・支援機器活用実践事例(特別支援学校版)

	実践名(実践年度)	パソコン部の活動(2018年)
参加する 授業について	教科名等 (該当する教科名等を選択。当てはまらない場合はその他を選択し、次の単元・題材名の欄に記入。)	☐ 国語 ☐ 社会 ☐ 算数/数学 ☐ 理科 ☐ 生活 ☐ 音楽 ☐ 図画工作/美術 ☐ 家庭/技術・家庭 ☐ 体育/保健体育 ☐ 道徳 ☐ 外国語/外国語活動 ☐ 総合的な学習の時間 ☐ 特別活動 ☐ 自立活動 ☐ 各教科等を合わせた指導 ☒ その他の教科 ☐ その他()
	単元・題材名	放課後のパソコン部の活動
	授業の目標	パソコン系検定試験の受験を目指す
	観点別学習状況の 評価の観点 (教科の特性により設定した観点がある場合は「その他」を選択し記載。)	☐ 「知識・理解」 ☐ 「技能」 ☐ 「思考・判断・表現」 ☐ 「関心・意欲・態度」 ☒ その他()
	自立活動の要素	☐ 健康の保持 ☐ 心理的な安定 ☐ 人間関係の形成 ☐ 環境の把握 ☐ 身体の動き ☒ コミュニケーション
学習 (集団) の実態	学部・学年・人数	☐ 通常の学級 ☐ 通級による指導 ☐ 特別支援学級 ☒ 特別支援学校
		☐ 就学前 ☐ 小学生 ☐ 中学生 ☒ 高校生以降 ☐ 特定されない
8人		
子どもの 実態	対象の障害	☐ 視覚障害 ☐ 聴覚障害 ☒ 知的障害 ☒ 肢体不自由 ☐ 病弱・身体虚弱 ☐ 言語障害 ☐ 自閉症 ☐ 情緒障害 ☐ LD(学習障害) ☐ ADHD(注意欠陥/多動性障害) ☐ その他
	子どもの課題 (特性・ニーズ)	☒ 聞く ☐ 読む ☐ 見る ☒ 話す ☐ 書く ☐ 運動と姿勢 ☐ 計算する ☐ 推論する ☐ 日常生活活動 ☒ 社会性・コミュニケーション ☐ 不注意 ☐ 多動性－衝動性 ☐ 覚える・理解する ☐ 時間的・空間的・人的交流の制約 ☐ その他 高等部1・2・3年生対象 個々の障害や特性、学習能力に差があり個性あふれる活動グループである。検定試験の合格を目指したい、パソコンがやりたい、1年生のときにやったから、高校生になったから、好奇心、ローマ字入力が上手になりたい、などさまざまな目的・目標があって入部してきた生徒達である。当初は特性に差がありすぎて思ったような活動が殆ど出来ていなかった。
ICT活用 について	使用した支援機器・教材の名称 (使用した支援機器・教材の名称を記載。なお、特定の製品に特化した実践の場合は製品名を記載。)	高等部PC室の教室 デスクトップパソコン スレートPC
	活用のねらい (概要)	A コミュニケーション支援(☐ A1意思伝達支援 ☐ A2遠隔コミュニケーション支援) B 活動支援(☒ B1情報入手支援 ☐ B2機器操作支援 ☐ B3時間支援) C 学習支援(☐ C1教科学習支援 ☐ C2認知発達支援 ☐ C3社会生活支援)
		パソコン部の部活動の中で、週1回1時間程度パソコンを利用した操作練習を行い、検定試験の取り組みを行う。
	活用方法	パソコンを利用して、基本的操作習得 インターネットを利用して情報検索等
効果・評価	ICTを活用した授業での 子どもの様子や変容および授業の評価	当初は、障害の特性や、学習能力の差が大きすぎて、生徒も教師も慣れず戸惑っていた。教師3～4人で生徒の対応を行い、一斉に活動を始めるまでには時間がかかった。 毎週部活動を行い、流れを把握出来るようになってくると、生徒同士、生徒と教師が慣れていくことができた。 落ち着いて活動ができるようになると、後半は教師1人で対応できることもあった。 学習能力について、アルファベットがわからない生徒が多く、ローマ字の読み方・ひらがな対応表の利用・既存のアプリケーションソフト・インターネットサイトのタイピング練習等を利用してローマ字入力に慣れていった。 また、自身がインターネットで検索したいものについては、ローマ字入力が上達していく様子が見られた。 一方で、最初の活動目的である、検定試験の演習を行希望した生徒にとっては、なかなか思うような練習が出来ず不満が残る活動体制となってしまったことは課題である。
資料	図・写真・表等 (生徒の写真は個人情報公開の確認を取っているものとする。)	